

# 和布刈

季は	地は	ツレ	後	前
		(天女)	前に同じ	ワキ 早鞆神職
十二月	豊前	シテ 龍神	ツレ 海士乙女	シテ 漁翁

「今日早鞆の神祭。く。尽せぬ御代ぞめでたき。

詞

「そもそも是は長門の国早鞆の明神に仕へ申す神職の者なり。さても当社に於て御祭さまぐ御座候ふ中にも。十二月晦日の御神事をば。和布刈の御神事と申し候。今夜寅の時に至つて。龍神潮を守護し。波四方に退いて平々たり。其時神主海中に入つて。水底の和布を刈り神前に供へ申し候。殊に当年は不思議の奇瑞御座候ふ間。いよく信心を致し。御神事を執り行はゞやと存じ候。

サシ「有難や今日早鞆の神の祭。年の極めの御祭と云つば。又新玉の年の始めを。祝ふ心は君が為め。

歌  
「春の野に出でゝ摘む若菜。く。生ひ行く末の程もなく。年は暮るれど緑なる。和布刈の今日の神祭。心を致しまぐに。君の恵みを祈るなり。

く。

シテ、ツレ一聲 「天地の開けし御代は久堅の。神と君との御かげか

な。

ツレ 「今日にめぐるも早鞆の。

二人 「共に暮れ行く年なれや。

シテサシ 「有難やそれ秋津洲の内に於て。神所の御祭さまぐなれども。

二人

「此早鞆の神祭り。世界わたづみ隔てなくて。藻

の礼奠感応の。海松和布浮和布の花も咲く。波を  
かざしの手向草。塵に交はる神心。誓ひに漏るゝ

方もなし。

下歌 「歩みを運ぶ此神に。いざ結縁をなさうよ。

上歌 「所は早鞆の。く。ゆきゝの舟も楫を絶え。数々  
の捧物。海士のしわざに至るまで。かひ有るべし  
や志。それこそ花の手向なれ。く。

ワキ 「不思議やな夕影すぐる神の御前に。手向を捧ぐる  
人影は。そもそも如何なる人やらん。

ツレ 「是は賤しき海士乙女の。数には有らぬ憂き身なる

が。手向を捧ぐるばかりなり。

シテ詞

「我は又年経て住める此浦の。漁翁の罪を恐るゝ故。  
賤しき者は軽き身を。浮べん為めにて候ふなり。

ワキ  
「中々なれや鱗までも。誓ひに漏れぬ此浦の。

シテ  
「海士の漁火焦がるとも。

二人  
「和光の影は曇りなく。

下歌地

「明らかなれや天地の。開けし神代の如くにて。す  
なほなるべき人心。いやましの瑞験。顯はれにけ

るぞ有難き。

上歌

「海原や。博多の海も程近く。く。汐引島も見  
え渡る。早鞆の友千鳥。沖の鷗も群れ立つや。春  
秋の。雲井の雁もとゞめ得ぬ。誰が玉章の門司の  
関守と。よみし心も理や。く。

地クリ

「それ地神第四の御代。火々出見尊。豊玉姫と契り  
をなし。海陸の隔てなかりしに。

シテサシ  
「其御産の時豊玉姫。尊に向ひ宣はく。

地

「産後に於て我姿を。あへて見給ふ事なかれと。御約諾の詔。互にかたく誓ひ給ふ。

クセ  
「然れども時至り。さすがに御氣色。いぶかしく思しけるかとよ。かいまみえさせ給ひしを。いとあさましと恨みかこち。長く海路の通ひを。立ち隠す波の玉の御子を。捨てつゝ豊玉姫は。龍宮に入り給ふ。其後潮さしひきの。朝暮の時はありながら。人畜類の生をそむき。境をさかりにき。

シテ  
「然れば神代の昔より。

地  
「此早鞆の神祭り。神慮普き誓ひなれや。上は非想の雲の上。下は下界の龍神まで。渴仰の心中。まことに深き蒼海を。陸地になして此国の。長門の通ひ隔てもなき。海蔵の御宝も。意の如くなるべし。

ロンギ地  
「げにや心の如くにて。く。此結縁もさまざまの。

人の願ひの無かるべき。

ツレ 「今は何をか包むべき。我住む方は久方の。

地 「天つ乙女の雲の袖。

シテ 「かざしの花の手向草。

地 「色こそかはれ。

シテ 「わたづみの。

地 「花は波路の底よりも。龍宮の捧げもの。天地ともに渴仰の。天つ乙女は雲に乗れば。翁は老の波に。隠れ入り給ひけりや。隠れ入らせ給ひけり。(中入)

地 「汀に神幸なり給へば。く。虚空に音楽松風に和して。皎月照らし異香薰する。龍女は波をもかざしの袖を。かへすも立ち舞ふ袂かな。(天女の舞)

天女 「さる程にく。

地 「和布刈の時至り。虎嘯くや風早鞆の。龍吟ずれば雲起り雨となり。潮も光り鳴動して。沖より龍神あらはれたり。

地 「龍神すなはち現はれて。く。

シテ「和布刈の所の水底を穿ち。

地「払ふや汐瀬に。こゆるぎの磯菜摘む。

シテ「めざし濡らすな沖に居れ波。

地「沖に居れ波と夕汐を退け。屏風を立てたる如くに分れて。海底の砂は平々たり。

ワキ「神主松明振り立てゝ。

地「神主松明振り立てゝ。御鎌を持つて岩間を伝ひ。つたひ下つて半町ばかりの。海底の和布を刈り帰

り給へば。程なく跡に汐さし満ちて。もとの如く荒海となつて。波白妙のわたづみ和田の原。天を浸し。雲の波煙の波風。海上にをさまれば。波風海上にをさまれば蛇体は。龍宮に飛んでぞ入りにける。